

江津地域の県立高校の在り方に係る県議会質問・答弁について
島根県自民党議員連盟 坪内議員 6月定例会一般質問・教育長答弁

令和5年6月21日

自民党議員連盟の坪内涼二です。改選後初となる一般質問、3項目について質問させていただきますので、執行部の皆様の前向きなご答弁をお願い致します。

1つ目は、江津地域の県立高校の在り方についてであります。丸山知事は今議会の施政方針において、「教育委員会においては、近年の少子化の影響や進学先の多様化により、江津地域における現状の県立高校の配置では、望ましい教育環境を将来にわたって維持することが難しくなってきていると判断し、その在り方の検討を始めている」と表明されました。これは、江津高校と江津工業高校の2校について、いわゆる統廃合の議論を始めているということであろうと捉えています。

教育委員会においては、平成21年2月に策定した「県立高等学校再編成基本計画」が平成30年度に終期を迎えるにあたり、平成28年4月に有識者で構成する「今後の県立学校の在り方検討委員会」を設置し、この検討委員会から提出された提言「2020年代の県立高校の将来像について」を踏まえて、現在の「県立高校魅力化ビジョン」を策定されました。

このビジョンは、少子化に伴う県内中学校卒業生数の減少や教育を取り巻く環境がめまぐるしく変化する状況を踏まえ、向こう10年間の島根県の教育の基本的な方向性と具体的な取組を示したものです。島根の子どもたち一人ひとりに自らの人生と地域や社会の未来を切り拓くために必要となる「生きる力」を育むため、「県立高校魅力化ビジョン」という、この名称が示すとおり、今後は高校と地域が一体となって、魅力ある高校づくり、魅力ある地域づくりを進めていくという方針を打ち出され、従来の再編成計画に示されたような、統廃合基準は示されませんでした。

しかしながら、浜田市、江津市の県立高校については、検討委員会から「中学校卒業生数が県西部の中で最も多いにもかかわらず、それを生かした高校の配置ができているとは言いがたい状況」という指摘とともに、今後のこの地域の高校の在り方については、「普通科、専門学科とも石見部全体での位置づけの中で議論すべき」、「これまでの普通科、専門学科という枠組みを超えて構想することも必要」、また「中学生の選択肢を増やすという観点から新たな学科や教育課程等の研究も必要」などの視点が示されました。

県教育委員会では、これらの視点を踏まえながら、この地域における魅力ある高校づくりの実現に向けた取組を進めていくこととし、具体的には各高校の魅力化・特色化を図るとともに、「高校と地域が一体となった魅力化・特色化の取組や成果を踏まえ、中学校卒業生数や入学定員に対する志願者数、入学者数の状況等を注視しながら、地域における高校・学科の在り方や配置について検討する」こととされたこと

ろです。

江津市においては、このビジョンに示された魅力ある高校づくりを進めるため、江津の未来を創造できる「未来人材」の育成を目的に、江津高校と江津工業高校、江津清和養護学校の県立学校3校と一体となって、チーム「県立学校GO▶GOTSUコンソーシアム」を令和2年度に設立しました。このコンソーシアムでは、3校が学校同士はもちろん、島根県立大学やポリテクカレッジ島根、各校卒業生会、PTA関係者、NPO団体など、3校を取り巻く地域の様々な組織や人々とともに江津のまちで学び、触れ合いながら、地域のニーズに基づく実践的・体験的な学びを通して、それぞれの学校の魅力化・特色化に取り組んでいます。

また、スポーツでは、先般実施された島根県高校総体において、江津工業高校の弓道男子団体、江津高校のハンドボール男子が優勝するなど、素晴らしい結果を残していますし、江津高校の水球部や江津工業高校のボート部などの生徒たちは、2030年の国民スポーツ大会「島根かみあり国スポ」での活躍が期待されています。このように、江津高校、江津工業高校、両校の生徒たちは魅力ある学び、魅力ある部活動に全力で取り組んでいます。

①従来の「県立高等学校再編成基本計画」に代わる、現在の県立高校魅力化ビジョンを策定するにあたり、検討委員会及び県教育委員会は、浜田市と江津市をひとつのエリアとして検討されてきた経緯があります。しかしながら、このたびの高校の在り方の検討は、江津市内の県立高校2校を対象とされています。この検討に至った背景について伺います。

(答弁) 県立高校魅力化ビジョンにおける地域別の高校の在り方については、松江市・出雲市の「都市部」と、この2つの市を除く「その他地域」の大きく2つの地域に分けて示しています。また、これとは別に、浜田市・江津市の県立高校の方向性については、先ほど議員がお取り上げになったとおり、検討委員会で示された視点を踏まえた取組や検討を進めることとして、各高校においては、地域と一体となった魅力化・特色化を進めてまいりました。

しかしながら、今年度の江津高校、江津工業高校では、両校とも入学定員が80人であるのに対し、入学者数と定員充足率は、江津高校が66名で82.5%、江津工業高校が45名で56.2%となっています。

また、今後、江津市内の中学校を卒業する生徒数の推計は、今年3月の180名に対して、現在の中学校一年生が卒業する令和8年3月が148名で32名の減、小学校一年生が卒業する14年3月が140名で40名の減、となっており、今年と14年を比べると9年間で22.2%の減であり、この間、増減を繰り返すものの、その減少傾向が顕著であると言えます。

一方で浜田市内の中学校を卒業する生徒数の推計は、今年3月の410名に対して、8年3月が415名で5名の増、14年3月が378名で32名の減、となっています。今年と14年を比べると7.8%の減であり、江津市ほどの大幅な減少は見込まれていません。

また、江津市内の中学校卒業者のうち、両校への近年の進学者数は、江津高校が3年度が47名、4年度が46名、5年度が45名、江津工業高校が、3年度から5年度までの3年間、各年度とも20名で

あります。

さらに、8年度にはこれが、江津高校が35名、江津工業高校が15名になると推計しており、両校とも、地元の中学生の入学者数がそれぞれ1学級40人に満たない状況が予測されます。

このため、このたびの検討では、浜田市と江津市をひとつのエリアとして考えるのではなく、江津地域の子どもたちの教育環境を最優先に検討していく必要があるとの判断をいたしました。

江津市では、平成27年1月に、当時、少子化の影響などから江津高校と江津工業高校の入学者数が定員を下回る状況が続いていたことから、有識者で構成する「江津市県立高校あり方検討会」を設置し、江津市内の高校生にとって望ましい県立高校の在り方を議論し、その検討結果を平成27年3月に江津市長に報告しました。

その後、当時の江津市長及び江津市議会議長が、この報告書を踏まえた要請書を平成27年6月に県教育委員会に提出しています。

また、県教育委員会では、現在のビジョンを策定するにあたって設置した有識者による検討委員会が、平成28年9月に江津市と浜田市において地域公聴会を開催されました。このうち江津市における地域公聴会では、当時の江津市長が、「何よりも大切なことは、江津の子どもたちの可能性を大きく広げることのできる県立高校であること。それと同時に地方創生といった観点に立って進めるべき」、「社会を取り巻く環境が大きく変化していく中で、求められている学校教育の在り方や教育効果などを勘案して検討していくことが必要」、「地域全体で子どもの成長を支える体制や、かかわりの中で生まれる絆が地域活性化の基盤となり、好循環をもたらすことも期待できる」などの意見を述べています。

さらに、経済界、青年会議所など地元を代表する4名からの意見陳述もありました。この中では、「市内2校を現状のまま残すことは、財政的にも教育環境の面でも適当ではない。1校にして子どもたちがより良い環境で学べるようにすべき」「小規模校では競争原理が働かない。人間関係づくりが困難となり、チームワークや交渉力が育たない」といった意見の一方で、「市内2校の統合は避けるべき。両校の特色を薄めることになる」といった意見や、「ものづくりに興味を持つ子どもたちを、石見地域の産学官民の協力・連携で育てていくことが求められる」、「キャリア教育の充実により、地元で働く、将来地元に戻ってくる子どもを育てるべき」など、様々な意見がありました。

こうした意見を聴き、私自身も江津地域における高校の存在や役割がいかに大きいということや、石見地域の産業を支える人材を育成することの重要性、地域と産業の連携など高校教育に寄せる地域の方々の思いをあらためて確認したところであります。

江津高校は今年度が創立65周年、江津工業高校は来年度で創立90周年を迎える伝統校です。先般、県教育委員会が再定義したスクール・ミッションによれば、江津高校は「多様な進路希望に対応したきめ細かな学びと、地域と連携した課題解決型学習等を通して、地域や社会に貢献するために挑戦し、未来を変えていく力をもった人材を育成する」高校、江津工業高校は「地元企業等との連携による取組の成果を

生かし、社会の変化や地域の産業界からのニーズに応えるものづくり教育を通して、地域産業等を担うことができる専門性豊かな工業人材を育成する」高校であることが求められています。

両校はこれらのスクール・ミッションに基づいてそれぞれのグランドデザインを策定し、これまで築き上げてきた伝統や精神を踏まえつつ、「育てる生徒像」であるグラデュエーションポリシー、「教育課程の編成と実施に関する方針」であるカリキュラムポリシー、「求める生徒像」であるアドミッションポリシーを明確にして、高校のホームページや学校案内のパンフレットなどを通じて中学生に対し、それぞれの高校の魅力や特色を発信しています。

②グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により社会は急速に変化しており、高校もまた、学校運営協議会やコンソーシアムなど多方面の方々からの意見を聴きながら、中学生から選ばれる魅力ある高校づくりに取り組んでいく必要があります。そうした中で県教育委員会では、江津高校、江津工業高校の2校の在り方について、今後どのような方向性で検討していかれるのか伺います。

(答弁) 知事が施政方針で示したとおり、今後の検討に当たっては、江津地域の子どもたちの選択肢を確保した上で、充実した高校教育を提供し、卒業後の進路に繋げていくことが最も重要であると考えております。そのためには、一定の学校規模において子どもたちの将来の夢の実現に向けた多様な学びのニーズに対応すること、また、学校行事や生徒会活動、部活動の充実などにより、コミュニケーション能力を身に付けたり、切磋琢磨できる教育環境を確保することが必要と考えます。

このため、現在、1学年2学級である両校を統合し、新たに1学年3学級の高校を設置することを基本として、検討を進めていきたいと考えています。

また、この新たに設置する高校においては、江津高校が築いてきた地域との連携による進学を念頭に置いた学びとともに、江津工業高校の前身校から数えると100年を超える学びと、県西部の工業教育へのニーズに対応した学び、これらの学びを継承する教育を目指します。

具体的には、進学を念頭においた学びのため、1学科1学級において、看護・栄養・保育などの資格職を目指すコースと文系進学を目指すコースを設定、また、工業教育の更なる魅力化を図るため、1学科2学級において、機械系・ロボット制御系・建築系・電気系のコースを設定したいと考えています。

これらにより、これまで両校が築いてきた学びを2学科3学級で更に充実させ、地域の中学校卒業生の進路の選択肢を確保し、子どもたちにとっても地域にとっても魅力ある高校づくりを進めたいと考えています。

なお、新たに設置する高校は、工業教育の実習施設や設備が必要であることから現在の江津工業高校の場所を念頭に検討することを考えております。

繰り返しになりますが、今後の検討に当たっては、何よりも江津地域の子どもたちの進路の選択肢の確保と、教育活動の充実を最優先に考えてまいります。

両校は伝統ある2校であり、また、これらの卒業生は県内にとどまらず、全国各地で活躍しておられます。卒業生のみなさんの母校に対する熱い思いは、卒業生会や同窓会等の折々に私自身も感じています。今後、仮に2つの高校が統廃合され、ひとつの高校になるという議論が進むことになれば、地元関係者や企業、小中学校の児童生徒や保護者への影響も大きいはずです。

③現在の「県立高校魅力化ビジョン」策定時には、検討委員会による地域公聴会が開催され、パブリックコメントも実施されています。このたびの検討にあたっては、できるだけ学校や地域の関係者の意見を聴いていただきたいと考えますが、県教育委員会においては、今後、どのようなスケジュールを考えておられるのか伺います。

(答弁) 先ほど、議員がお取り上げになったように、江津市におかれては、江津高校、江津工業高校と江津清和養護学校の市内3校とともにコンソーシアムを設置していただき、地域の様々な組織の方々と江津地域の未来を担う人材の育成に取り組んでいただいております。県教育委員会といたしましては、こうした地域の方々からのご意見をいただきながら江津地域における教育環境の整備を進める必要があると考えております。

そのために、まずは、本議会の終了後の7月中に、学校関係者や地域の方々を対象とした説明会を開催いたします。また、8月から、有識者で構成する島根県総合教育審議会において、江津地域の県立高校の在り方について議論を始めます。あわせて、両校の学校運営協議会や、先ほど述べたコンソーシアムからもご意見を伺ってまいります。

こうしていただいたご意見などを踏まえて検討を重ね、都度都度、県議会にもご相談し、ご意見を伺いながら、できれば年内に、基本的な方針を決定したいと考えております。

なお、新たに設置する高校の開校時期につきましては、教育課程の検討や、それを実現するための施設整備を伴うことから、令和10年度前後になろうかと思っております。

④再質問 答弁の中での定員の充足率について、江津工業は45名で56.2%と厳しいと思いますが、江津高校の82.5%という数値が、県内の他の中山間地域等に立地している高校に比べて、とびぬけて低い数字ではないと受け止めています。併せて市内の子どもたちが少なくなっており、市内から2つの高校に行く生徒も必然的に少なくなってくることは理解できますし、市内で生まれる子どもの数が100人を切ってきたという大変厳しい状況があります。一方で江津高校では寮がない中で市外からの生徒の受け入れも力を入れてきており、一定数の市外から入ってくる生徒がいます。また、江津工業は石見地域唯一の工業高校であり、そういった意味で市外から通う生徒もいる状況の中で、答弁では江津市の子ども数が減ってきて1クラス維持できない、40人に満たない状況とのことでしたが、市外からも生徒を受け入れているこの取組みの状況も見ながら、この議論を進めていただきたいと感じています。令和10年度前後と具体的な時期も答弁の中に盛り込まれました。いろんな角度からこの問題を捉えていただき、結論ありきで議論を進めることのないようお願いいたします。

(答弁) 江津高校の充足率につきましては、今年は少し市外生が多く入ったということがございます。令和8年の推計では、先ほども申し上げました市内からの子どもが35名程度になるのではないかと、そして市外からの子ども11名程度ではないかと、というふうに予測しております、46名程度ということで、5割に近い充足率が予測されております。

こういったことも踏まえながら、将来予測を立てながら、検討をしているところでございます。

また、地元の方にとりまして、約10年前近くから、一度浜田市と合わせた高校の再編の話が、地元をまき込んで行われたところ、結果的には再編がなく、話が終わった、終息したという状況で、今般、統合の話が、しかも具体的に2校の統合の方向で検討するというお話をさせていただきました。

大変、地元の方にとっては、突然の話であろうと不安に思われたりしていると思います。

先ほども述べましたが、こういった検討に至った状況を、地元の方にもしっかりと丁寧に説明させていただいてご理解を得て、そして何度も申し上げております、江津の子どもたちが将来どういう高校教育の環境があれば魅力的で明るく前を向いて高校を目指す、あるいは将来の選択をするといったことができるのか、この点を最優先に考えて、検討を進めていきたいと思っております。

私が述べました考え方、これに固執している訳でも、決定した訳でもございません。設置者としての検討案、たたき台といいますか、そういうものをお示ししないと議論がなかなか進まないことでもありますし、設置者としての責任としてお示しすることが大事だと思っておりますので、この2年間、内部ですっきり検討を進めて、今般の基本的な我々の案、地域の方に検討いただく案というものを、ここに公表させていただいて、地域の方と話し合いを進めていきたいというふうに考えております。

議員あるいは地元の方のご不安にしっかりと応えながら、丁寧に議論を進めていきたいと考えております。